

レスリー・ジェーン・イールズ・レイノ  
ルズ、ブレンダ・ジャッジ、エレイン・  
マックリーリー、パトリック・ジョー  
ンズ 著、楠見孝、田中優子 訳

## 『大学生のためのクリティカル シンキング 学びの基礎から教える実践へ』

北大路書房、2019 年  
168 頁、2,200 円（税別）

本書は、訳者の「はじめに」によれば、「教育学や心理学を学ぶ学生が、専門分野において必要な基礎的な学習のスキルと研究法を学びつつ、批判的思考（クリティカルシンキング）のスキルや態度（マインドセット）を身につけるための教科書」であるというが、しかし、読んでみれば、文系理系を問わず、すべての学生あるいは教員にとっても役に立つハンドブックである。論理学の初歩や議論分析を基礎にした、従来型の批判的思考の教科書とは異なり、誰もがインターネットで検索エンジンを使い、遠隔コミュニケーションを日常的に行うデジタル時代の情報リテラシーを不可欠の要素とした21世紀の批判的思考のあり方を明らかにしている——「批判的思考者になるためには、情報収集への合理的（論理的）アプローチを取らなければならない。」(p.74)。さらに研究倫理（第3章）、量的データと質的データの取り扱い方、現象学やエスノグラフィ、アクションリサーチと

いった質的研究の方法論（第4章）、文献資料の取捨選択、先行研究の評価（第5章）等についても批判的思考の中に含めており、人文社会科学系の研究者養成のために広く有益である。

批判的思考の定義について、解釈、分析、評価、推論、説明、そして内省（リフレクション）を含むメタ認知を反復するプロセスないしサイクルと捉える、このような考え方は標準的であるが、加えて「問いを出すアプローチ」を重視している点が哲学対話を実践している私たちにとって興味深い。「～ということは明らかである」で終わる言明に対して「健全な懐疑的態度を育む必要があること」(p.28)、そのことは「自身の考えに対して進んで疑問を投げかけること、そして他者の考えや物の見方に対して開かれた心をもつこと」が苦手な大人よりも子どもの方が得意だということが示唆されている。子どもの哲学の有効性をサポートする知見である。さらに「問題を注意深く十分に定義する、問題のすべての側面を調べる」、さらに「他人の価値観や意見に耳を傾ける」(pp.83-84) ことは、多様な哲学対話の実践にも共通して必要な問いの技法でもある。

批判的に読むだけでなく批判的に書くこと（ライティング）の重要性を、後半部で2章を割いて集中的に論じている。マインドマップを用いて自らブレインストーミングを行い、論文のアウトラインを立てる。特にライティングを分析する（第7章）、熟慮的に書くことが「批判的内省」(p.93)を涵養する。ここで「内省する」(reflect) という言葉についての説明が興味深い。経験に立ち戻り、「細部まで思い浮かべるための想像力」を駆使し、感情に注意し、「有益な感情を用いたり、邪魔な感情を除くあるいは管理する」、そして経験を評価する、

すなわち「既存の知識と照らし合わせながら、経験を再考する」(p.89) という意識的な「自己参照」(self-referencing) の諸段階を経て内省は深められるというが、これはソクラテック・ダイアローグの際に意識的に実行されているのと同じである。実際、哲学対話の諸技法もさまざまなスキルと特性から成るが、批判的思考と同様、対話のスキルであると同時にメタ認知的なスキルであると考えれば、それらは方法的に上手く整理されるのではないか。他方、ライティングは他者と共に社会の中で批判的思考者として成長するために不断に実行される自己との対話であると思えば、それはある意味で「自己への配慮」(フーコー)にも通じる自己訓練なのであり、その意味で教育学の文脈に位置づけられた批判的思考の孕む問題性(政治-社会性)をも暗示すると言える。

最後に、批判的思考のコミュニティ(第9章)で論じられる「学びの共同体」に関して述べられている知見——「あるテーマについて知っておくべきすべての知識を持ち合わせていたり、ある課題を達成するために必要なすべてのスキルを持つことは誰もできない。私たち1人ひとりが、自身の人生の経験や、価値観、視点を、課題を達成するために持ち寄るのである。」(p.117)——について一言認めておくと、確かに一般的に言って教育の現場では課題の達成が求められるであろうが、哲学対話においては必ずしもそうではない。むしろ達成感よりも残存するモヤモヤ感が哲学対話においては大事にされるべきなのではなかろうか。同時に、ここで触れられている「聞くスキル」(p.124)、またオンラインでのグループワークの際の「ネチケット」(p.130)なども、遠隔コミュニケーションが不可避の日常となった現今の状況下でコミュニ

ティを作るためには是非とも必要な技法である。

望月太郎(大阪大学)